

中学3年生の英語調査・イメージ（案）

	全国学力・学習状況調査における中学校の英語 (悉皆)	世界的な枠組みを活用した経年比較調査 (全国無作為抽出)
調査目的	<p>学習指導要領</p> <ul style="list-style-type: none"> 各学校において、生徒一人一人の学力・学習状況を把握し、指導や評価の改善・充実 国・教育委員会において、生徒の状況を把握することによる教育施策の改善・充実 	<ul style="list-style-type: none"> 全国的な英語力の到達度を含めた傾向の把握（世界的な指標であるCEFRを活用した生徒の到達度の分布、質問紙調査とのクロス集計等によるレベル別の課題把握等を含む） 経年変化の把握等による国の教育施策の改善・充実 国の「教育振興基本計画」に掲げる生徒の英語力（英検3級程度）の目標に係るPDCAに活用
調査対象	悉 皆	抽出（29年度は、中3（3人）、高3（2万人）を対象）
問題の公開	<p>全て公開</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒一人一人の課題を把握し、教員の指導と生徒の学習の改善に取り組むため、教育委員会・学校の教育施策や指導の改善・充実に資するデータとして提供 IRT、CEFRとの関連付けが不可能 	<p>非公開（一部公開）</p> <ul style="list-style-type: none"> 生徒の到達度の把握、レベル別の課題の把握・分析による指導改善の方向性を提示することが可能 IRTにより、経年変化の分析が可能 CEFRとの関連付けが可能
実施時期	<ul style="list-style-type: none"> 「聞く」、「読む」、「書く」の調査は、中3の4月20日に最も近い火曜日に、<u>全国一斉の実施日</u>を設定 「話す」については、上記の調査実施後、一定程度の期間を設け実施（例えば、1週間程度）（8月末に結果を提供し、年度内に生徒にフィードバック、各学校における指導の改善・充実に活用） 	<ul style="list-style-type: none"> 中3の夏頃、一定の期間内において、学校の状況に応じて実施日を設定（フィージビリティ調査は、原則7月の間に実施、9月～11月に生徒個票を順次返却。1、2月頃に速報、最終結果報告は3月末） 中3の履修状況も踏まえ、規模縮小の場合は<u>秋以降実施も検討</u>
実施時間	<ul style="list-style-type: none"> 「聞く」「読む」「書く」で45分間程度 「話す」は10分程度（調査問題5分程度、入替準備5分） 	<ul style="list-style-type: none"> 把握すべき学力に応じた調査時間（2単位時間程度） <p>（参考）平成28年度フィージビリティ調査</p> <p>「読む」32分 28問、「書く」25分 2問</p> <p>「聞く」18分 32問、「話す」10分 3問</p>
調査問題・質問紙	<ul style="list-style-type: none"> 「聞く」「読む」「書く」「話す」で構成 45分間程度の中で、学習指導要領に示す目標に沿って、知識・技能等を実際のコミュニケーションの場面において活用する力等を4分類（「統合型」を含む）で調査を行うという観点から、A、B問題という区分はしない 学習指導要領の理念を具体的メッセージとして示すものとする 	<ul style="list-style-type: none"> 左記と同様
問題冊子	<ul style="list-style-type: none"> 全ての生徒が同じ設問に取り組み（「話すこと」については、実施期間に応じて別問題になる 	<ul style="list-style-type: none"> 左記と同様

数	可能性もある)、明らかになった課題を各学校での指導改善に活用するため、1分冊	
作問	<ul style="list-style-type: none"> ・義務教育段階の調査として全ての学校・生徒が参加し、国としての責任を果たす ・学校、教育委員会、大学の英語教育に関する有識者が参画する会議において作問 ・これまでの蓄積を生かして継続性・安定性を確保する ・学習指導要領改訂、その他英語教育などとの関連に関する分析の継続活用が可能 ・出題の意図を踏まえ、教委や学校においてより具体的に指導に当たることが可能 	<ul style="list-style-type: none"> ・IRTを使って経年比較を行うため、民間のノウハウを活用する（特にCEFRとの関連付けた分析が可能） ・国は作問基準の策定、問題を検証。 ・実施ごとに公募・契約（委託先変更の可能性） ・国は作問基準の策定、問題を検証
頻度	<ul style="list-style-type: none"> ・全ての学校での負担を勘案すれば、3年に一度程度 	<ul style="list-style-type: none"> ・抽出校は原則として毎回変わる。
実施方・体制	<p>(調査方法・体制等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「聞く」は、教室内においてDVD等による音声で一斉実施 ・「読む」「聞く」は、マークシート式 ・「書く」は、短文記述式など ・「話す」は、コンピュータやタブレット等を活用した音声録音による調査を実施) <p>(採点方法・体制等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「読む」、「聞く」は、マークシートに基づきコンピュータ採点 ・「書く」は、短文記述式の解答を画像でデータ処理を行い、別地点において評価基準に基づき一定の要件を備えた採点者が採点 ・「話す」は、録音データを評価基準に基づき一定の要件を備えた採点者が採点 <ul style="list-style-type: none"> ・当面、解答類型による評価とする。なお、次期学習指導要領を踏まえ、ルーブリック型による評価を検討 	<p>(調査方法・体制等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「聞く」「読む」「書く」は、左記と同様 ・「話す」は教員と生徒の対面調査を実施 <p>※対面式で行うことによる効果：①聞き手、話し手に配慮してコミュニケーション能力を測定、②教員が参加することにより指導・評価の改善を図る（特に課題となっているパフォーマンス評価等の改善へ）</p> <p>(採点方法・体制等)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「読む」、「聞く」、「書く」は、左記と同様 ・「話す」は、一定程度の質を確保するため、教員の事前研修（研修用DVD付属冊子の内容の充実等）を改善・強化し、教員と生徒の対面で調査を実施 ・ルーブリック型による評価

<p>結果の示し方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・設問ごとに、生徒一人一人の定着状況を把握することを目的としており、 ①国・都道府県・市町村・学校別に、平均正答率を1問ごとに提示 ②学習指導要領に沿って、課題となっている生徒の発信力（「話す」「書く」）について「互いの考えや気持ちなどを英語で適切に伝え合うコミュニケーション能力を適切に評価する観点や評価基準の在り方について、引き続き、検討。 （「聞くこと」「読むこと」の受信技能については、選択肢又は短答式の問題形式を想定） ・「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」で結果を示す方向を検討（A、B問題の問題構成はない前提） ・その場合、総合的な結果を表示することなどは、引き続き、課題等を検討 	<ul style="list-style-type: none"> ・把握すべき学力に応じて、部分点を設定することが可能 ・IRTを活用し、CEFRとの関連付けも可能
----------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------